日本の鍼灸諸派の現状

伊藤和真[1, 3)]、嶺聡一郎[2)]
1）名古屋医専　鍼灸・あん摩マッサージ教員養成学科
2）名古屋医専　鍼灸学科　3）京都大学大学院人間・環境学研究科

【はじめに】

日本は東アジアで最も東に位置している。この地理学的条件から歴史的にも朝鮮半島や中国から鍼灸治療の理論や道具、そして技術を取り入れてきた歴史を持つ[i]。しかし、中国や朝鮮半島の国々の影響を受けながらも中国や朝鮮半島とは異なる鍼灸治療の理論[ii]やそれを具現化する道具と技術[iii]を生み出し、現在も育んでいる。

視点を現代世界に移してみる。中国や韓国は各自国の伝統医学をまとめ直し、中国は「中医学」[iv]を、韓国は「韓医学」[v]をつくり、国策の一つとして世界へアプローチをかけている[vi]。日本は特徴的な鍼灸治療理論や独特の道具、技術など独自の鍼灸治療文化を持ち、欧米を中心とした諸外国にも知られ[vii]、国内外で実践されている。中国や韓国の動向を視野に入れた視点から現在、『「日本鍼灸」とは何か』が議論されることがある[viii]。だが現在まで日本の鍼灸を概括し、そこから導き出された「日本鍼灸」を述べるに至っていない。しかし「日本鍼灸」を述べる前に「日本の鍼灸」つまり現在、日本で行われている鍼灸治療を調査し、整理する必要があると考える[ix]。「日本の鍼灸」の概括が理解されることにより、「日本鍼灸」を話し合うための基盤を持つことができると考えるためである。

【目的】

本研究の目的は現在、日本で行われている鍼灸諸派の現状を明らかにすることである。

ここで本論文における言葉の定義を述べておく。

「日本の鍼灸」とは、現在、日本で行われている鍼灸治療法とする。

「諸派」とは、治療体系の違いにより生じた各鍼灸治療法とする。

「日本鍼灸」とは、「日本の鍼灸」を調査、整理した上で導き出されるであろう日本独自の鍼灸治療法もしくは診察や治療内容など日本の鍼灸の共通項とする。

【方法】

対象は2010年4月初から2011年3月末までに出版された鍼灸関連商業誌4種類とした。調査対象としてはインターネットなども用いることも考えられたが、情報が極めて多くなることと本調査と関係がない情報も多数含まれることなどを考え、今回は鍼灸関連商業誌を対象に選んだ。具体的には『医道の日本』12冊、『中医臨床』4冊、『鍼灸OSAKA』6冊、『鍼灸ジャーナル』6冊の合計26冊であった。

方法は以下の手順を踏まえた。

1. 上記商業誌に記載されている研究会、講習会、学会情報を抜き出す。
2. 抜き出した情報から諸派に関する内容を選別した。
3. 選別した内容を具体的な諸派に分類し、サブカテゴリーを抽出した。そこから共通する部分をカテゴリーとして抽出した。諸派の分類が上記資料では理解しづらい場合は、インターネット上の各派のホームページの内容を参照し、選別の参考とした。

【結果】

諸派に関する研究会、講習会、学会数は103であった。これらの内容よりカテゴリーは4、サブカテゴリーは7であった（表1）。具体的内容としてカテゴリーは【現代西洋医学的鍼灸治療派】【東洋医学的鍼灸治療派】【気の認知的鍼灸治療派】【その他】であった。サブカテゴリーは【現代医学的鍼灸治療派】は2で［現代西洋医学（正統的医学[x]）派］、［電気抵抗を指標にする派］であった。【東洋医学的鍼灸治療派】は3で［現代古典派］、［古典文献派］、［現代古典派と古典文献派の理論統一または折衷派］であった。【気の認知的鍼灸治療派】は2で［身体現象を通じて気の状態を診察・診断する派］、［直接、気の状態を感じて診察・診断する派］であった。

次にそれぞれ具体的内容について説明をしていく（表2）。カテゴリーである【現代西洋医学的鍼灸治療派】の定義は「現代西洋医学的な身体観や疾病観を治療体系のもとにしているもの。または現代西洋科学を

診察、診断の指標にしているもの」とした。サブカテゴリーである［現代西洋医学（正統的医学）派］の定義は「現在の医学部で教育される現代西洋医学の診察、診断体系を用いるもの」とした。［電気抵抗を指標とする派］の定義は「人体のある部分における電気抵抗を診察し、それを診断、治療の指標とするもの。身体観や疾病観は現代西洋医学的視点の他に東洋医学的視点に立脚するものもある」とした。次に具体的な研究会について述べる。［現代西洋医学（正統医学）派］は日本臨床懇話会や現代医療鍼灸研究会などがあげられる。［電気抵抗を指標とする派］は日本良導絡自律神経学会やAMI臨床研究会などがあげられる。

カテゴリーである【東洋医学的鍼灸治療派】の定義は「一般的に述べられている[xi]東洋医学的な身体観や疾病観を治療体系のもとにしているもの」とした。サブカテゴリーである［現代古典派］の定義は「（中国・韓国・日本の）伝統的な医学を、現代[xii]の人々が（ある意図[xiii]を持って）まとめ直し、体系化したもの」とした。［古典文献派］の定義は「（中国・韓国・日本の）伝統的な医学を、現代の人々が文献を読み解くことを中心として、（できるだけ忠実に）復元しようとしたもの」とした。［現代古典派と古典文献派の理論統一または理論折衷派］の定義は「現代古典派と古典文献派の理論を統一または折衷し体系化したもの」とした。次に具体的な研究会について述べる。［現代古典派］は〈経絡治療〉〈中医学〉〈韓医学〉〈その他〉の４つに分類した。〈経絡治療〉は経絡治療学会、東洋はり医学会、東方医学鍼灸臨床研究会（：東方会）などがあげられる。〈中医学〉は命門会、三旗塾、中医学ネットワーク、中医学研修セミナーなどがあげられる。〈韓医学〉は日本高麗手指鍼協会などがあげられる。〈その他〉は積聚会、奇経医学研究会などがあげられる。［古典文献派］は〈日本-江戸時代の鍼灸治療〉がみられた。これには『杉山真伝流』勉強会などがあげられる。［現代古典派と古典文献派の理論統一または理論折衷派］は北辰会などがあげられる。

カテゴリーである【気の認知的鍼灸治療派】の定義は「東洋医学の概念の一つである気を実在するものと規定し、東洋医学的鍼灸治療派で用いる四診とは異なる診察法を用いて気の状態を診断し、治療を行うもの。治療体系のもととなる身体観は東洋医学的内容だけでなく、現代西洋医学的内容を含む場合もある」とした。身体観の「現代西洋医学的内容も含む」とは東洋医学的内容である臓腑経絡の考えだけでなく、心臓や肝臓、腎臓など臓器の気の状態を意識する視点から記載した。サブカテゴリーである［身体現象を通じて気の状態を診察・診断する派］の定義は「治療者や患者の身体の一部の変化を知覚することにより、気の状態を認知するもの」とした。身体の一部の変化の例として、治療者の手部や胸鎖乳突筋などの筋緊張の変化により、気の状態を認知するなどがある。［直接、気の状態を感じて診察・診断する派］の定義は「五感やそれ以外の感覚により、気の状態を直接、認知するもの」とした。次に具体的研究会について述べる。［身体現象を通じて気の状態を診察・診断する派］は東京入江FT塾、針灸気診研究会などがあげられる。［直接、気の状態を感じて診察・診断する派］はいやしの道協会、柿田塾などがあげられる。

カテゴリーである【その他】はまだ、しっかりと分類できていない状況である。【その他】の内容には多くの派が含まれると考える。現在、分類の可能性があるものをあげておく。［個人が学んだ内容を体系化したもの］として長野式研究会や筋診断協会などがあげられる。［全身治療を中心としたもの］として臨床針灸医学研究会などがあげられる。全身治療とは一般的にいわれる全身調整を目的としたもので、経穴の働きに注目したとも考えられる。［反応点を中心としたもの］として反応点治療研究会などがあげられる。

【考察】

本調査より「日本の鍼灸」はいくつもの諸派により構成されていることが明らかとなった。本調査では４カテゴリーの存在を提示した。治療体系はカテゴリー別だけでなく、サブカテゴリー別にも異なっていた。これより「日本の鍼灸」諸派の治療体系は同じ傾向にあるのではなく、さまざまな治療体系からなる。つまり多様性を持っている。これは中国や韓国[xiv]との大きな相違点であり、日本の特徴であると考える。今後、「日本鍼灸」を論じる上で、多様性はキーワードになる可能性を持つと考える。治療体系の多様性の一例として、日本には現代西洋医学的視点に立脚した【現代西洋医学的鍼灸治療派】が存在する。これは日本の近・現代医学史との関係や国民教育[xv]などの影響により生じたと考えられる。この派は中国や韓国との相違

点の一つであり、日本の特徴であると考える。

諸派の分類の中で【東洋医学的鍼灸治療派】［古典文献派］がある。その内容として今回は〈日本-江戸時代の鍼灸治療〉がみられた。これをもとに考察すると、その他の内容として〈日本-江戸時代以前の鍼灸治療〉〈日本-江戸時代の鍼灸治療〉〈中国-黄帝内経・難経の鍼灸治療〉〈中国-黄帝内経・難経以降の鍼灸治療〉の分類が考えられる。ただし、この分類は日本は時代を表記し中国は書物を表記していること、時代を指標にするとしてもこの分類でよいのか、などいくつかの問題を含んでいる。

次に本調査の問題点と課題を述べていきたい。
第1に本調査は現在という時間的並列で概観した。つまり現在を横断的に見たものである。今後は時系列的に概観することにより、諸派の歴史的位置関係や相互関係が明らかになると考える。第2に本調査の対称期間が2011年度の1年間と短期間であった。今後は対象を長期間とすることで、より実情にあった諸派の存在が明らかになると考える。第3に本調査を商業誌に限定したことである。今後は書籍やインターネットなど、より多くの媒体を調査対象にする予定である。そうすることで「日本の鍼灸」の現状認識が深まると考える。第4に結果のカテゴリーのその他で述べたとおり、本調査結果はまだ十分なものではない。より十分な内容に近づけるために諸派の定義の再検討とそれに基づく再分類の必要がある。第5に本調査から研究会は治療体系の伝達だけでなく、診療技術や治療技術の伝達を目的とした内容も存在した。具体的には明鍼会、東京九鍼研究会、大師流小児はりの会、日本刺絡学会、灸法臨床研究会などがあげられる。今後はこのような技術伝達という視点からも調査を行う予定である。そこから「日本の鍼灸」の特徴を明らかにしていきたいと考えている。

【結語】

現在、日本に存在する鍼灸諸派について、商業誌を対象に調査を行った。結果として日本にはいくつものは派が存在することが明らかとなった。これは中国や韓国と異なる特徴であった。今後は対象年数や対象内容の拡大、分類視点の多面化により、「日本の鍼灸」の俯瞰図を明らかにしていく予定である。

【謝辞】

諸派の分類において筑波技術大学の形井秀一先生にご助言をいただきました。また首都大学大学院の箕輪正博先生、根岸とも子先生には諸派の調査内容についてご助言をいただきました。深謝致します。

脚注

i 小曽戸洋『漢方の歴史－中国・日本の伝統医学』東京：大修館書店，1999年，pp. 85-150.
小曽戸洋『中国医学古典と日本－書誌と伝承－』東京：塙書房，1996年，pp. 5-32.
酒井シヅ『日本の医療史』東京：東京書籍，1982年，pp. 32-190.

ii 御薗意斎の意斎流（夢分流）打鍼による腹診術、江戸時代の諸派、近年では澤田健による澤田流太極療法、弥生会メンバーらによる経絡治療がその代表であろう。
上地栄『昭和鍼灸の歳月－経絡治療への道－』東京：績文堂，1985年.
酒井シヅ　前掲書，pp. 207-208.
代田文誌『鍼灸真髄』横須賀：医道の日本社，1941年.
「特集　澤田健の太極療法」『医道の日本』809号（2011年9月号），pp. 33-79.
西條一止，他監修『鍼灸臨床の科学』東京：医歯薬出版株式会社，2000年，pp. 8-12.

iii 打鍼術で用いる小槌、管鍼術で用いる鍼管などがその代表例である。

iv 現代中医学理論は古代からの伝統中国医学の理論を概括し再構築したものというよりも、ヨーロッパ医学の影響が多分に入り込んでいる。これは「中西匯通派」と呼ばれる中西折衷派的な医師たちの思考により現代中医学理論の根幹が形成されたためと考えられる。
また、現代中医針灸学の形成には、多くの日本人や日本の書籍が強く影響したことも認知しておくべきである。
石田秀実『中国医学思想史』東京：東京大学出版会，1992年，pp. 296-310.
クロイツァー，C. ラルフ著，難波恒雄，難波洋子，大塚恭男共訳『近代中国の伝統医学－なぜ中国で伝統医学が生き残ったのか』大阪：創元社，1994年，pp. 165-248.
真柳誠「現代中国鍼灸学の形成に与えた日本の貢献」『全日本鍼灸学会雑誌』56巻，4号（2006），pp. 605-615.

v 曺基湖，徐延徹，李源哲，他「韓国韓医学学会の現状と鍼灸分野における近代韓日交流史－鍼灸学を中心に－」『全日本鍼灸学会雑誌』52巻，5号（2002），pp. 601-609.

vi 形井秀一，松田博公「松田博公・対談シリーズ「日本鍼灸を求めて」第12回　危機の中の日本鍼灸・

中国鍼灸界の世界戦略と直面する諸問題　形井秀一」『鍼灸ジャーナル』12号(2010年10月号), pp. 15-33.

形井秀一，後藤修司，東郷俊宏，他「特別座談会　鍼灸の国際標準化と日本鍼灸　前編」『鍼灸ジャーナル』18号（2011年1月号），pp. 51-63.

津谷喜一郎，若山育郎，関隆志，他「WFAS世界鍼灸学会連合会学術大開inストラスブールを終えて－鍼灸の国際標準化と中国の動向－」『医道の日本』798号（2010年3月号）pp. 23-36.

vii 近年では経絡治療、大師流小児鍼、積聚治療などが、欧米にて講演会などを開催している。

品田眞希子「ドイツ小児鍼特別リポート　世界を驚かそう！ドイツ小児鍼講習会」『鍼灸ジャーナル』12号（2010年1月号），pp. 58-61.

バーチ，スティーブン「経絡治療発展の概要－ヨーロッパにおける日本経絡治療－」『医道の日本』806号（2010年11月号），pp. 96-100.

横井ひかり「第7回積聚治療ボストンセミナー報告」『鍼灸ジャーナル』19号（2011年3月号），pp. 29-31.

viii 「日本鍼灸」を打ち出す理由として、日本の鍼灸が中医学という一つの伝統医学に収められてしまうという視点がある。しかし、より重要なことは人類が存続するため地球環境保護と維持を前提とした持続可能な社会構築の必要性から伝統医学の多様性は重要であり、その一つとして日本鍼灸は必要である、という視点、そして世界における日本の鍼灸の問題は日本国内の問題でもある、という視点は今後の日本鍼灸業界が進む方向性として深く考えるべき内容である。

形井秀一，松田博公　前掲書.

形井秀一，後藤修司，東郷俊宏，他「特別座談会　鍼灸の国際標準化と日本鍼灸　後編」『鍼灸ジャーナル』19号（2011年3月号），pp. 51-65.

ix 先行研究として形井や箕輪らの調査、発表がある。大変参考になるものの日本の鍼灸を全般的に調査したものとは言い難い。

形井秀一，加賀谷雅彦，宮川浩也「日本伝統鍼灸の現状」『日本伝統鍼灸学会雑誌』28巻，1号（2001），pp. 27-31.

箕輪政博「鍼灸師のためのライフワーク指南・その9「一本の鍼と一握りの艾で癒す」醍醐味～技術私論①鍼灸技術の実情を冷静に考えてみる～」『医道の日本』794号（2009年11月号），pp. 180-184.

x 医療社会学分野で用いられる用語である。日本においては医学部で教育される近代自然科学に基づいた近代医学理論の中で標準的理論とみなされる部分を「正統的医学」または「科学的医学」と呼ばれる。

佐藤純一編『文化現象としての癒し－民間医療の現在』大阪：メディカ出版，2000年，p. 9.

xi 一般的に述べられているとは、ここでは身体のもととしての気や血、水（津液）、臓腑、経絡経穴、それらの基本概念としての陰陽論・五行論、疾病観としての内因・外因・不内外因、疾病を理解するための四診法や証概念、治療としての補瀉論などを示す。

東洋療法学校協会編『東洋医学概論』横須賀：医道の日本社，1993年.

xii 日本の歴史的には19世紀後半の開国から第二次世界大戦終結までを近代、連合国占領以降を現代と区分する。経絡治療は(昭和16)年に誕生したと考えると、その時代は近代に含まれる。しかし大戦後期の活動状況や戦後の発展を考慮して、本論文では現代とまとめた。

井上光貞，笠原一男，児玉幸多，他『詳説日本史（改訂版）』東京：山川出版社，1987年，pp. 225-359.

上地栄　前掲書　pp. 225-359.

xiii 意図とは各国によって異なる。中国の場合、西洋医師が希少状態の中で国民の健康保持と伝統医学の西洋医学化、国家的文化遺産化を目的とした側面があると考えられる。韓国の場合、自国の伝統医学の文化遺産化の側面を持つと考えられる。日本では経絡治療を例にとると、古典による鍼灸治療を一般鍼灸師に理解・普及しやすくする側面と漢方復興運動のもとに構築された理論体系である側面を持つと考えられる。

上地栄　前掲書　pp. 166-195.

クロイツァー，C. ラルフ　前掲書　pp. 165-220.

xiii 曹基湖，他　前掲論文.

xiv 韓医学の鍼方法には対症鍼療法、舎岩鍼法、董氏鍼法、五行鍼法、耳鍼療法、薬鍼療法、蜂毒療法、平鍼和療法、相対性鍼法、手指鍼法、八体質鍼法、体質鍼法、三極鍼法などが存在する。各鍼法は共通理論の上に行われているのか、それぞれ異なる理論の上に行われて、それらをまとめて韓医学と称しているのかは今後、より詳細な調査が必要と考える。

曹基湖「日中韓鍼灸コミュニケーション　韓国の鍼灸事情」『全日本鍼灸学会雑誌』61巻，2号（2011），pp. 36-40.

xv 近代西洋科学や近代西洋的思想を中心とした教育。

参考文献

石田秀実『中国医学思想史』東京：東京大学出版会，1992.

井上光貞，笠原一男，児玉幸多，他『詳説日本史（改訂版）』東京：山川出版社，pp. 225-359.

形井秀一，加賀谷雅彦，宮川浩也「日本伝統鍼灸の現状」『日本伝統鍼灸学会雑誌』28巻，1号（2001），pp. 27-31.

形井秀一，後藤修司，東郷俊宏，他「特別座談会　鍼灸の国際標準化と日本鍼灸　後編」『鍼灸ジャーナル』19号（2011年3月号），pp. 51-65.

形井秀一，松田博公「松田博公・対談シリーズ「日本鍼灸を求めて」第12回危機の中の日本鍼灸・中国鍼灸界の世界戦略と直面する諸問題『鍼灸ジャーナル』12号（2010年10月号），pp. 15-33.

形井秀一，後藤修司，東郷俊宏，他「特別座談会　鍼灸の国際標準化と日本鍼灸　前編」『鍼灸ジャーナル』18号（2011年1月号），pp. 51-63.

上地栄『昭和鍼灸の歳月－経絡治療への道－』東京：績文堂，1985年.

クロイツァー，C. ラルフ著，難波恒雄，難波洋子，大塚恭男共訳『近代中国の伝統医学－なぜ中国で伝統医学が生き残ったのか』大阪：創元社，1994年.

小曽戸洋『漢方の歴史－日本・中国の伝統医学』東京：大修館書店，1999年.

小曽戸洋『中国医学古典と日本－書誌と伝承－』東京：塙書房，1996年.

酒井シヅ『日本の医療史』東京：東京書籍，1982年.

佐藤純一『文化現象としての癒し－民間医療の現在』大阪：メディカ出版，2000年.

品田眞希子「ドイツ小児鍼特別リポート　世界を驚かそう！ドイツ小児鍼講習会」『鍼灸ジャーナル』12号（2010年1月号），pp. 58-61.

代田文誌『鍼灸真髄』横須賀：医道の日本社，1941年.

曺基湖「日中韓鍼灸コミュニケーション　韓国の鍼灸事情」『全日本鍼灸学会雑誌』61巻，2号（2011），pp. 36-40.

曺基湖，徐延徹，李源哲，他「韓国韓医学学会の現状と鍼灸分野における近代韓日交流史－鍼灸学を中心に－」『全日本鍼灸学会雑誌』52巻，5号(2002)，pp. 601-609.

東洋療法学校協会編『東洋医学概論』横須賀：医道の日本社，1993年.

「特集　澤田健の太極療法」『医道の日本』809号（2011年2月号），pp. 33-79.

津谷喜一郎，若山育郎，関隆志，他「WFAS世界鍼灸学会連合会学術大開 in ストラスブールを終えて－鍼灸の国際標準化と中国の動向－」『医道の日本』798号（2010年3月号）pp. 23-36.

西條一止，熊澤孝朗監修『鍼灸臨床の科学』東京：医歯薬出版株式会社，2000年.

バーチ，スティーブン「経絡治療発展の概要－ヨーロッパにおける日本経絡治療－」『医道の日本』806号(2010年11月号）pp. 96-100.

真柳誠「現代中国鍼灸学の形成に与えた日本の貢献」『全日本鍼灸学会雑誌』56巻，4号(2006)，pp. 605-615.

箕輪政博「鍼灸師のためのライフワーク指南・その9「一本の鍼と一握りの艾で癒す」醍醐味～技術私論①鍼灸技術の実情を冷静に考えてみる～」『医道の日本』794号（2009年11月号），pp. 180-184.

横井ひかり「第7回積聚治療ボストンセミナー報告」『鍼灸ジャーナル』19号（2011年3月号）pp. 29-31.